

歌がすき 渡川 誠

「歌いたく、なりて家出る おぼろ月」

童句創始者土家由岐雄先生のお作で、私の好きな一句でもある。

子どもの頃の私も、よく歌いたくなつて、表へ出たものだった。小学校へ入学したばかりの五月ごろ、母が病氣のために、母の実家へ預けられていた。岡山県も鳥取県に近い地方の、山の上にあるお寺だった。

住職である叔父が夕方の鐘を、ゆつくりと撞く。空は茜色、向かいの山々は青から赤紫、さらに黒ずんだ紫に変わつて行く。谷間の村は、真ん中を川が流れ、その両側は水田が広がり、山の裾に向かつて、家々が点在する。藁ぶき屋根の家や、瓦屋根から、ほの白く煙が登つて、ゆれる。私は石段に腰を掛けて歌つた。

夕やけ小焼けで日が暮れて
山のお寺の鐘がなる……

石段を降りたところに、お寺の山門がある。その前の道を、牛を追つて帰る人がいる。二、三人の子どもたちが、手をつないで走つて行く。誰も聞いていない、それでも私にとって、こんなに気持ち良く歌える舞台は無かつた。土家由岐雄先生が、「僕は皿洗いを手伝うよ、皿洗いは、童謡を歌いながらやると、はかどるよ、『月の沙漠』はテンポがゆるすぎる、『赤とんぼ』もそう。てんでん手毬でん手毬がいいんだよ。それから、『証城寺のためぎばやし』も、スポンジを持つ手が良く動くよ」と、歌いながら話されたことがある。お聞きしたのは、米寿のお祝いは来年、というお年の時だった。

童句振興協会会長広沢一岐先生原案企画の、二〇〇八年、第八回市民芸術祭の舞台公演「春ものがたり」第二部「入間川の春」見つめる「一茶の目」では、童謡『一茶さん』



「春ものがたり」第2部「入間川の春」より
一茶と子どもたちの場面

童句翁忌童句大会

主催 狭山童句研究会
共催 狭山台公民館
日時 7月7日(日) 13時30分～
場所 狭山台公民館

葉書で、未発表の童句3句を
〒350-1304 狭山市狭山台2-1-2-17-205
渡川 誠宛 お送り下さい。

締め切り 6月29日

当日参加できない方も、投句で参加して下さい。
大会の日、互選によって入賞者を決めて、通知
します。

（狭山童句研究会会長
文芸さやま編集委員）

誠

が歌われた。この歌は、広沢先生がこどもの頃、一所懸命に覚えた心に残る歌であり、今日の『童句』につながるきっかけと考えられると、広沢先生は述懐しておられる。

一茶居の 蔵をすみかに ちちろ虫 一岐

狭山市文化団体連合会の会員の皆様も、絵が描きたくて、踊りが踊りたくて、花が飾りたくて、などなど、好きから始まっていると思う。そして努力と修練の賜物が、毎年の芸術祭には華やかに発揮され、感動を呼んでいる。

私が所属している女声コーラスグループは、三十八年目を迎える。まだ歌いたい気持ちにはもっていたい、歌を忘れたカナリヤにはなりたくない。そして『童句』も詠み続けたと思つている。

鳳仙花 弾せてはじまる はないちもんめ

編集後記

野菜づくりも趣味の私は、異状気象には困っている。普通の生活では解らないが、小雨で乾燥、突風に遅霜… 作物の出来も育ちはそこそこでも早仕舞い。もっとも簡単に出来るのではつまらない。経験から対策を考え、試行錯誤するのも楽しみの一つです。

文団連も横山会長で新年度。課題も多いが皆で盛り上げ、楽しみながら一歩でも進んで行きたい。

(高沢正夫)